

電子版

西日本支部通信

第22号 (通巻122号)

Nishi-Nihon Branch Newsletter No. 22
The Musicological Society of Japan

発行：日本音楽学会西日本支部
〒610-0395 京都府京田辺市興戸
同志社女子大学学芸学部音楽学科 椎名研究室
E-Mail：msjwestatdwc@gmail.com
TEL：0774-65-8501
FAX：0774-65-8504

巻頭言

支部長 椎名亮輔

この巻頭言を書くのも最後である。2期4年間勤めさせていただいたわけだが、そのうち最初の1年目は全国大会で翻弄され、残りの3年間はコロナに翻弄されるという怒涛の4年間になってしまった。任期終わりに当たって、この4年間について振り返ってみると、たとえば例会開催については、2019年に3回(4月14日、5月25日、7月13日)、2020年に1回(7月11日)、2021年に2回(7月10日、8月22日)、2022年に2回(7月16日、12月4日)にとどまってしまった。1年目は秋の全国大会の委員長となったために、秋以後の例会開催への余力がなかったのが原因であり、2年目以後はコロナ禍によるものだ。とくに2020年はこの前代未聞の疫病が猖獗を極め、人が集まるのがすべて禁止となってしまうために、なすすべもなかったのが実情である。

しかし、どのように理由づけをしてみたところで、やはり大変に少なく、忸怩たる思いであり、みなさまには申し訳ない気持ちでいっぱいである。なかでも毎年7月にはきちんと、九州例会開催に協力していただいた九州地区の委員の方々には頭が上がらない。いくら感謝してもしたりない思いである。2021年の2回目も、東洋音楽学会との共同でやっと開催可能となったのである。このようななか、なんとか最後の最後に、私の発案で田崎直美さんと大田美佐子さんの素晴らしい新著(それぞれ『抵抗と適応のポリトナリテ』、『クルト・ヴァイルの世界』)をまとめて取り上げて、東京からは渡辺裕先生にも来ていただき、多少とも大規模な例会をもよおすことができたことが、せめてもの救いである。

実を言えばこの3月にも、修士論文・博士論文の発表のための例会を催したかったのであるが、各大学からの連絡がそろわぬまま、時間切れで来期にお願いするという形になった。ここには、まだまだコロナの余燼が感じられる。もちろん完全な終息など予兆も見られない。各大学をはじめ、さまざまな研究活動において、以前と同じような活発な活動にはまだなかなか戻ってっていないのが実情なのであろう。しかしまた、以前にも書いたことだが、コロナ禍によってリモートによる活動(学会発表や論文指導、口頭諮問など)の新たな可能性が開けたのもまた事実である。私たちは、そのような、あらゆる可能性を縦横無尽に用いながら、どんどん研究活動を発展させていかなければならないと思うのである。これからは、私も一学会員として、わずかな一助にでもなることができればさいわいである。4年間、ありがとうございました。

□ 目 次 □

支部長 巻頭言	・ ・ ・ ・ 1
定例研究報告 西日本支部第55回（通算406回）定例研究会 [ラウンドテーブル]	・ ・ ・ ・ 3
大戦期欧米の音楽への新たなまなざし：文化・社会史としての音楽研究の可能性 登壇者1： 大田美佐子（神戸大学） 『クルト・ヴァイルの世界』を捉え直す	
登壇者2： 田崎直美（京都女子大学） 文化史・社会史と音楽学	
コメンテーター・ ファシリテーター1： 椎名亮輔（同志社女子大学）	
コメンテーター・ ファシリテーター2： 渡辺裕（東京大学名誉教授） 「言語論的転回」後の歴史学 ～音楽研究との接続のために～	
報告者： 井口淳子（大阪音楽大学）	
編集後記	・ ・ ・ ・ 7

□定例研究会報告□

■西日本支部 第55回(通算406回)定例研究会

日時 : 2022年12月4日(日)14:00-16:00
会場 : 京都女子大学図書館交流の床ホール
例会担当 : 今田健太郎(四天王寺大学)
司会 : 椎名亮輔(同志社女子大学)
内容 : ラウンドテーブル

登壇者1:

『クルト・ヴァイルの世界』を捉え直す

大田美佐子

発表者による要旨

本発表では、歴史(Geschichte)が「物語」でもあることを前提に、学術研究としての「評伝」の可能性を探るため、拙著『クルト・ヴァイルの世界』で試みたことを紹介した。まず冒頭に、「冷戦の終結」という時代背景のなかで醸成された執筆者自身の問題意識と、基礎となる研究と評伝執筆の経緯を説明した。

その後、亡命作曲家クルト・ヴァイルの経験とその受容を織り込んだ評伝の執筆で、実際に試みた視点を以下の五つのキーワード「手紙」「人」「分断」「景色」「形」を設定して説明した。まず、ひとつ目のキーワード「手紙」では、評伝の基盤となった1472通の往復書簡という「一次資料」の取り扱いについて、二番目の「人」では、環境の変化によって、文化的にも複数のアイデンティティを持ち、革新的に成熟し得る多面体としての「人」の柔軟性について述べた。三番目の「分断」では、亡命作曲家の作品や思考に見られる「分断」の由来や、その質の検討や評価の必要性について。四番目の「景色」では、同じ史料や音楽が、異なる「景色」のなかで受容されるケースを、どのように評伝や文化史の記述として展開し得るのか、「越境的対話的」に音楽文化史を語る重要性について指摘した。そのうえで、ヴァイルの場合、亡命以前も亡命以降でも、音楽劇では言葉に対して拮抗し、音楽が「自律」した存在であり、その創作の根底に、物語やテーマを音楽的構造のなかに展開させるという「一貫した」思考を持っていたと評価した。

田崎直美氏の『抵抗と適応のポリトナリテ -ナチス占領下のフランス音楽』では、フランスにおける「占領下」の特殊性を指摘し、占領前・占領下・解放後での制度・社会・人の変化を丹念に調査して追い、「抵抗と適応」「レジスタンスと対独協力」の複雑な反応が、時に一人の人間の中でさえポリトナリテとして響き渡る様相が活写されている。時代とそこに生きた人々を軸に描くことによって明らかになった戦時期の文化行政と社会、人間との間に生じる複雑なダイナミクスは、歴史の細部が単純化を拒み、その差異と複雑性にこそ真実が宿ることの証左である。その点で、一人の亡命作曲家の経験した複雑性をどう評価し描くのか、というクルト・ヴァイル研究とも問題意識を共有していることに気づいた。

登壇者2

文化史・社会史と音楽学

田崎直美

発表者による要旨

本発表は、同じ対象時期(第一次世界大戦から第二次世界大戦にかけて)のもとで異なる地域と異なる研究方法を採用した二冊の研究書を例に、文化史としての音楽の歴史(物語)の方法論と意義を問い直すことを目

的とした。

拙著『抵抗と適応のポリトナリテ：ナチス占領下のフランス音楽』の例では、まず「①歴史学と音楽学の協働」の意義を提示した。ここでは歴史学と音楽学という二つの学問領域の、単純な事実・出来事の「並置」や「相関関係」ではない、変容する有機体としての社会と音楽実践との「相互作用」を明らかにすることを試みる立場を指す。手掛かりとしたのが、フランス(ヴィシー)政府が自国の尊厳・存在意義のために特殊な強権体制下で実施した文化政策である。音楽の政治利用とそのあり方は、他の時代や地域にも普遍的にみられる表象であったが、音楽学の立場から文化状況に関する史料調査をするなかで、音楽分野に限定されない政治・社会史へと連結する事象の発見もあった。その一例として本発表では、音楽家を活用したヴィシー政府の失業対策のありかたと、それが後世のフランスの政治・社会に与えた影響について、具体的に紹介した。併せて本発表では、当時の音楽家たちが権力側からの圧力(政策)に対してどのような態度を選択したのか、「②ミクロな物語の集積」として提示する方法を採ったことを述べた。

大田美佐子著『クルト・ヴァイルの世界 ―実験的オペラからミュージカルへ』は、一人の音楽家を通して当時の文化・社会を映し見るといふ歴史記述方法の一例である。ここでは、複数の「語り」(資料としての言説、筆者と対象との「対話」による「語り直し」、研究史・受容史)が交差することで、伝記が文化史および芸術論になりうるという意義を提示した。

最後に二冊の研究書を比較しつつ、文化史・社会史記述においては「音楽の自律性」そのものを時代や社会との関連性において常に問い直す必要性を提唱した。

コメンテーター・ファシリテーター1

椎名亮輔

コメンテーター・ファシリテーターによる要旨

第二次世界大戦の時期を扱った2著書へのコメントとして、まず、私自身の最近の研究から3つの事例を付加した。フランスのピアニストでユダヤ人であるユーラ・ギュレル、スペインの作曲家でパリで生活していたフェデリコ・モンポウ、そして田崎著書でも扱われていたフランスのラジオ技師、ピエール・シェフェールである。

ギュレルは大戦前夜の30年代に上海にわたり消息が途絶える。39年にパリに再び現れるが、その後は、非占領地域マルセイユのパストレ伯爵夫人の庇護のもとに過ごしたようである。モンポウは、パリで生活をしながら故郷バルセロナと行き来をしていたが、36年のスペイン内戦後は緊迫を増す社会情勢のもと、イタリアやスイス、フランスなどで様子を伺っていた。ナチスのパリ占領以後、一時帰国のつもりでバルセロナに帰ったが、パリには戻れなくなってしまった。シェフェールに関しては過不足ない記述が田崎著書にはあるが、私の興味が彼のGRMなどに関わる活動であるために、同じ資料を見ている観点が異なり、それがひいては研究の色彩の相違に結果している。

この後、両著書へのコメントとなるが、前半の最後が田崎著書へのコメントともなる。すなわち、シェフェールに関して、主に3点：若い頃のボーイスカウト運動での芸術活動、ステュディオ・デッセー(クリュブ・デッセー、GRMC、GRM)の歴史の一貫性、グルジェフとの関係であり、ほかにオネゲルについても、観点の違いから来る差異が存在する。これは歴史学一般において、歴史記述の主体の差異から来る不可避の問題だと思われる。

大田著作に関しては、1)私の付加した事例に関連して、多くの人物が当時のヴァイルと関わりを持っていること、2)ヴァイルの音楽と演劇についての論では、古典派様式の誕生要因にオペラを挙げているチャールズ・ローゼンの論との真逆の方向性について要考察、3)歴史的記述のなかに現在までの影響を混ぜ込むことについての一長一短、すなわち歴史が現在まで連続していることを意識させる長所、歴史的記述が中断されてしまう短所。

コメンテーター・ファシリテーター2

「言語論的転回」後の歴史学 ～音楽研究との接続のために～

渡辺裕

コメンテーター・ファシリテーターによる要旨

文化史、社会史的研究はいまや、音楽学研究の中で大きな位置を占める存在になり、多くの良質な研究が生み出されるようになってきている。しかしながら、その問題意識やもの見方にかんして、歴史学などの諸学から多くを得ているにもかかわらず、これら諸学に対して音楽学研究自体がその成果を十分に投げ返すことができているとは必ずしも言えない状態にある。そのためには、「言語論的転回」を経た歴史学において現在の研究動向が生みだされてくる根柢に何があったのかを、その原点にたちもどって捉え返し、音楽学としてそのような問題意識にどのように向きあってゆくべきかを考え直してゆくことが必要であろう。

そのような観点にたって今回のコメントでは、近年の歴史学の動向のなかから、1. ナショナル・ヒストリーからグローバル・ヒストリーへの転換、2. 「公文書中心史観」の見直し、3. 「感性史 (Sensory History)」研究の展開、4. 歴史記述としての歴史小説や歴史映画への着目、の諸点を取り上げ (第4点については、ラウンドテーブル当日は時間の関係で割愛)、原点となったヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー』にはじまる歴史学研究の流れの中で、「歴史的事実」の成り立ちを歴史観や歴史表象とのかかわりのなかで捉え返してゆくなかから、それらの問題が出てきた経緯について述べた。

音楽学の領域では、制度やイデオロギーへの着目こそが新しい視点であり、かつて主流であった作曲家や作品自体をテーマにした研究はもはや過去のものになったかのようにも受けとめられがちである。しかしそのようにみってみるとむしろ、それぞれの作曲家の活動に徹底的にこだわる個別研究や、音や聴覚に徹底的にこだわった研究のほうにこそ、歴史学が新たな地平を開いてゆくことに寄与できる余地が多く残されているように思われるのである。

レポーターによる報告

井口淳子

晩秋の京都で久々に対面のみの例会が開催された。全面ガラスの明るい京都女子大学の会場には予想以上に若手や大学院生が多く、例会というよりもシンポジウムといった雰囲気であった。

今回の企画は、今年、大著を刊行されたお二人、田崎直美氏と大田美佐子氏のお二人に登壇いただき、自著を語るとともに、両氏へのコメンテーターとして椎名亮輔氏と渡辺裕氏にそれぞれご発言いただくという内容であった。

まず、田崎氏は著書『抵抗と適応のポリトナリテ - ナチス占領下のフランス音楽』で試みたこと、として「歴史学と音楽学の『協働』」というキーワードをもとに、ケーススタディとして細やかに書著の中でとりあげた事象をあらためて解説された。

ここでいう「協働」とは、田崎氏の中に内在する二つの側面、「歴史学的対象と研究方法」と「音楽学的対象と研究方法」である。

たとえば、ヴィシー政権下のフランスでは音楽家の失業問題があり、それにたいする政策がいかに実行されたのか、パリ市公文館や失業対策庁責任者の伝記やフランス国立公文書館での史料の発見など、歴史学者が取り組むかのような緻密で粘り強い史料調査が展開される。一方で、対象は音楽家であり、音楽家たちがヴィシー政権下で「適応」、「抵抗」とさまざまな選択をとったこと、それを「あえて大きな物語を作らない」「ミクロな物語の集積」という形をとった点こそが、田崎氏の著書の特徴となっている。

一方、大田美佐子氏は著書『 Kult・ヴァイルの世界 - 実験的オペラからミュージカルへ』を捉え直すことをテーマに、この書で試みたこととして、「手紙・人・分断・景色・かたち」をキーワードにあげた。まずは Kult・ヴァイルをめぐる「二人のヴァイル」論争の経緯と現在、および研究史が解説された。亡命前のヴァイルと亡命後のヴァイル、この分断されたヴァイル像をひとりのヴァイルとして捉え直すために、5つのキーワードにそって、何を史料(資料)とするのか、その資料をどう捉えるのか、ヴァイル研究が一筋縄ではいかないことが説得力をもって説明された。

印象に残ったキーワードは数多いが、中でも『「景色」と評価』には大田氏の視野の広さがあらわれていた。たとえば、ヴァイルは世界中で受容されており、それぞれの国、地域の景色の中でヴァイル作品がどう評価され記憶されるのか、自著でも「日本におけるヴァイル受容」をとりあげており、ひとりの作曲家と作品を多様な景色の中に置いてみる、そこには無限の語りの豊かさが潜在していることが伝わってきた。

以上のようなお二人の登壇者の発表の後、まず、椎名亮輔氏によるコメントが述べられた。しかし、実は

コメントのみならず、椎名氏自身が取り組んでおられる大戦期の欧米の音楽の3つの事例の簡潔な発表が主な内容であった。戦前、8年ものあいだ失踪したピアニスト、ユール・ギュレル、戦時下のフェデリコ・モンポウ、ピエール・シェフェールの戦争体験とラジオ活動、3人にまつわる一次史料や書簡を例示しながら、戦時の音楽家、作曲家の行動を研究するためには、資料を見極める極めて高度な「センサー」のようなものが必要であることが伝わってくるコメントであった。

最後に登壇された渡辺裕氏（登壇者お二人がともに研究上、大きな影響を受けたと述べられた）は「言語論的転回」後の歴史学 - 音楽研究との接続のために」というテーマで、先の二人の登壇者の著書とも絡めながら「歴史学のなにが変化しているのか」について簡潔に紹介。まず、言語論的転回とはヘイドン・ホワイトによる1973年刊行でありながら邦訳は2017年の『メタヒストリー：19世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』を指している。ヘイドン・ホワイトによる転回から半世紀が過ぎた今でも史料、一次資料といったアーカイブ史料を最上位に置き、史料第一主義的な伝統的歴史学の手法が根強く残っている中で、「公文書中心史観」を見直す研究が出現していること、その具体例として社会史、文化史の新たな潮流を示す植民地研究などが紹介された。時間の関係で準備されていた「感性史（Sensory History）研究の系譜」と「歴史記述と映像メディア」について割愛されたのは非常に残念であった。文字資料だけが資料ではなく映像、音などの感性に関わる記録も歴史資料であり、近年のこの分野の進展が文献リストからも伺えた。

フロアからは時間を大幅に超える質問が寄せられた。

大戦期の欧米の音楽について日本語で執筆し、公開する意味を問うものや、歴史学の資料調査の手法をとる音楽学研究について、歴史学にはない音楽学の独自性はどこに求められるのか？といった問いであった。登壇者お二人の著書はきわめてハイレベルな一次資料を扱い、歴史学とも重なる資料群を扱っているだけに、それらを音楽学の成果としてまとめる過程で、ある種の「物語化」というバイアスがかけられる危険はないのだろうか、という意味の質問であった。これに対しては、四名それぞれが、明快に資料調査を尽くすこと、丹念に資料を読み解くこととそれを音楽学の成果としてまとめることに矛盾は起きず、音楽学独自の領域がある、と異口同音に返答された。

テーマが大戦期ということで、目下のロシア・ウクライナの戦争も参加者の脳裏に浮かんだことと思う。戦争が亡命者、避難民を生み出し、人々を苦境に陥れるとともに、ある種の文化交流を促す（渡辺氏）ことも、今後、音楽学における重要テーマとして取り上げられるであろう。

二時間半、よい意味での緊張が途切れることはなく充実した例会であった。何よりもこれだけ多くの若い世代（非会員も多かった）が来場されたことに、明るい展望を感じるとともに、非会員に例会を広く告知する方法を考える必要があると感じた。

□ 編集後記 □

『西日本支部通信』第22号(電子版)をお届けいたします。今号には京都女子大学で開催された第55回定例研究会の報告が収録されています。例会での発表者とレポーター、コメンテーターの皆様には厚くお礼申し上げます。そして前号に引き続き、編集作業にご協力いただいた立命館大学大学院の奥坊由起子さんにも感謝いたします。

パンデミックが終息し、オンラインでの例会活動が数年ぶりに再開できたことは喜ばしい限りです。西日本支部の会員が刊行したばかりの二冊の著作をめぐるラウンドテーブルというユニークで豪華な企画が、支部活動の「復活」を強く印象づけました。

しかし、支部通信に掲載される定例研究会の記録が一回分だけというのは、やはり少し物足りない気がします。次号はもう少しボリュームのあるものをお届けできることを願っております。修士論文と博士論文の発表も、若い研究者の学会デビューの場として重要ですから、早く「復活」してほしいものです。

今後とも西日本支部の活動にご協力いただけましたら幸いです。最後に、各種学会関連情報のアクセス方法についてお知らせします。(Y)

FILE 西日本支部通信

年に2回、PDFで発行され、西日本支部のホームページより随時閲覧可能ですが、下記の「西日本支部メーリングリスト」(msj-k)にご登録いただくと、直接お手元に配信されます。個々のご事情で、紙面版の送付をご希望の会員は支部事務局にご相談ください。

MAIL 日本音楽学会Information Mail

学会本部より毎月1回、各支部の例会、支部横断企画、研究発表奨励金など、多様な情報が送信されています。登録ご希望の方は、日本音楽学会本部事務局 office(at)musicology-japan.org 宛に、件名を「インフォメーションメール登録希望」としたメールを送ってください。

日本音楽学会西日本支部メーリングリスト (msj-k)

支部会員のコミュニケーションを促進し、音楽(学)や学会活動などについて議論や情報の交換をおこなうことを目的としたメーリングリストです。登録ご希望の方は、担当の齋藤桂委員 ke-saito(at)kcua.ac.jp までご連絡ください。

WEBSITE 日本音楽学会 <http://www.musicology-japan.org/>

日本音楽学会西日本支部 <https://rcjtm.kcua.ac.jp/pub/msj/>

当通信へのご意見・ご質問、ならびに原稿掲載のご希望がございましたら、編集担当委員までご連絡(連絡先は末尾に記載)ください。あわせて、本部・支部の事務局等に宛てて原稿をたまわる折、PCの記号の使い方について、以下ご参考くださいますと幸いです。

- ・ 以下の記号は、ウェブサイト上で適切に表示されない場合があります。
文字内の補助記号(ウムラウトやアクセントなど) / 半角カタカナ
文字装飾(丸付き文字や全角データとしてのローマ数字)
- ・ 文中に傍点や書式設定(ゴシック・イタリックなど)を設定なさいたい場合は、メール本文でなく、Microsoft Wordのファイルに記入して、メールに添付してください。

日本音楽学会『西日本支部通信』第22号

発行者：日本音楽学会西日本支部

事務局：西日本支部長 椎名亮輔(同志社女子大学)

〒610-0395 京都府京田辺市興戸 同志社女子大学学芸学部音楽学科 椎名研究室

E-Mail: msjwestathandai@gmail.com TEL: 0774-65-8501 FAX: 0774-65-8504

編集者：吉田寛(2022年度編集委員)

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学文学部美学芸術学研究室

E-mail: hyoshida@l.u-tokyo.ac.jp